

川崎市長賞受賞作品

三田の自然

三田小学校 5年生 佐藤 湊

ぼくの家近くには、緑が多くて生き物たちが多く住んでいるすてきな公園がある。学校が終わると、ぼくはその公園にすぐ行きたくなる。

その公園は、大きな山をななめに切ったような形で、公園の周りには大きなサクラの木が何本も生えていてそのあいだに、イチョウの木がかさなるように生えている。公園の入り口には、白や赤など色とりどりの花がさくツツジが植えられている。

春になると、大きなサクラの木の枝の先に小さなサクラの花がぽつぽつとさき始め、一週間もしないうちにサクラの花は、満開になる。その時のぼくの楽しみは、ブランコをこぎながらサクラを見上げたり、バドミントンの最中に落ちてくる花びらを、手でキャッチしてみせることだ。

サクラの花がすべてちって地面がピンクにそまった後は、ぼくのおまちかねのツツジの花のパーティーだ。ツツジのがくの上から花びらごとぽろっとちぎってその先をチュウッとすいこめば、ほんのり甘い味がする。それを初めてパパに教わってから、何人もの友達に広めていった。

公園の水が冷たくて、おいしくなるころ、その時から夏が始まる。最初のセミが鳴いたら、「今年も虫あみを新しくしなきゃ。」と思う。ママもパパも意地悪でそうそう新しい虫あみを買ってくれない。だからぼくの虫あみはボロボロだ。いつもあなが空いたり、のびちぢみができなくなったりする。毎年夏の間は、虫あみと虫かごを持ってカナヘビやセミを採ったりしている。去年一番うれしかったのは、つかまえたカナヘビがたまごを生んでくれたことだ。五ミリくらいで、形も色もにわたりのたまごそっくりだった。

サクラの葉っぱもすっかり落ちて、いよいよイチョウの木が黄色くなり始めるころ冬がやってくる。ぼくの楽しみはひみつ基地作りだ。おち葉を集めてふかふかにしたり、ロープをはって林の中のしゃ面に下りられるように工夫するのがおもしろい。公園にはサクラの枝が落ちているから、いい枝をひろってチャンバラが始まったりする。切りかぶに立ってすっかり茶色になった、公園を見まわすとき、夏の間は葉っぱで見えなかった遠くの景色が見えて公園が改めて広いことに気付く。

将来ぼくが大人になっても、このままの公園であってほしい。多少歩きづらくても、草がおいしげっていても、散歩中に蚊にさされても自然ってそうゆうものだ。ぼくたちが楽しむだけではなくて、虫もへびもカナヘビもみんなが気持ちいいと感じることが大切だ。